

「贋物」横行世界での「本物」志向の達成度

——嘉部嘉隆著『森鷗外——初期文芸評論の論理と方法^①』を読んで——

福 本 彰

一

本書の△あとかき▽で、嘉部嘉隆氏は、二度も磯貝英夫氏の評言を引用している。しかも、どちらの引用の仕方、通例の△あとかき▽によく見られる外交辞令を弄するためのものとは、無縁なのである。本書収録の論考で採った氏の基本的な研究姿勢・方法をわざわざ明示することに関わって、それらは引用されている。

氏がそこで言っていることを私の△ことば▽にして述べると、次のようになる。

一、色眼鏡をかけて研究対象を見ないように心掛けたこと。

一、なんとなくぼんやり式の「感じ」、「印象」論ではなく、研究対象の性質をよく弁えて、徹底的に読み抜くことを心掛けたこと。

こと。

研究者として至極もったもな姿勢・方法の開陳と言うべきだが、それを△あわざわざ明示▽しなければならなかったところに、本書の問題性がある。そして、それは又氏の心裡に、苛立ちにも似た不満感が潜んでいることも、恐らくは不可分であろう。

それにしても、△あとかき▽での二度にわたる磯貝評言の引用は、否定対象の手近な好例ではあろうが、それに尽きるものでもない。

昭和54年5月26日、上智大学で、日本近代文学会春季大会が行なわれた。「明治二十年代の森鷗外」という小特集のテーマのもとに、嘉部嘉隆・竹盛天雄・磯貝英夫諸氏の発表があった。最初に嘉部氏の不慣れを感じさせる時折のギクシヤク発表があり、次いで竹盛氏の芝居仕立的な鷗外像の自己陶酔的発表となり、最後に如何に

も場慣れした感じでの磯貝氏の発表となった。そこで磯貝氏は、論の枕で（この部分は機関誌「日本近代文学」第26集の収載文中では削除され活字化されていない）、前の二人の発表に触れたのであるが、嘉部氏の発表内容の方を「わずかな例でもって、大胆な仮説を……」という意味の言辞でさりげなく皮肉った。批評として見た場合、的はずれであるが、初舞台の嘉部氏にとっては、頭にひっかかる性質のものである。

自著を上梓するにあたって、重なる研究対象領域の書物が、先に華やかなたちでぶら下がっているというのは、その事だけでも意識的にならざるを得ないものであるが、如上の経緯も加わって、あの△あとがき▽での異例のことが生じたのであらう。^③

右のことは、私の邪推する嘉部氏の個人的心裡の事情であるが、この表面的問題（△あとがき▽での磯貝評言の再度の否定的引用問題）を、さらに突き詰め、深く測鉛を下ろして行けば、或いは単純に、文字通り指向するところを受け留めれば、研究方法の差異性と、それを弁別・明示せざるを得ない状況の問題になる。一つに括って、手っ取り早い言い方をすれば、磯貝英夫著『森鷗外―明治二十年代を中心に―』（明治書院刊、昭54・12・10）と嘉部嘉隆著『森鷗外―初期文芸評論の論理と方法―』（桜楓社刊、昭55・9・30）の内実と時運の問題と言うことになるであらうか。

まず、両著を読み較べて、余りの研究方法の対照的なことに驚かされる。しかも対照的なのは、如上のことだけでなく、浮かびあがってくる鷗外像、収録論文の初出誌の性格、初出時の研究者の反

応、上梓後の反応等々もそうである。^④そして、この問題の根はやはり、研究方法に基づいている、と思う。

研究方法から両著の特色を見ると、（語弊を取って覚悟の上で評すると）磯貝著は△森を見て樹を見ず▽であり、嘉部著は△樹を見て森を見ず▽である、と言えよう。共に強い方法意識に貫かれている。巨視的、微視的の兼ね合いの中でと称える、常識論を知った上での、敢えての処置であらうし、持続性をも考慮に入れると、それだけで十分に批評主体に成り得ているものである。（手頃な△さわり▽評文や△目立つ▽評説に目をつけて、あれこれ捏ねまわし、さも批評意識や問題意識があるかのように見せかける、△ぐうたら▽文と次元を異にしている。）

磯貝氏が△森▽（総体）或いは「全体」ということは等で志向対象を屢々明記もしている。を見んとし、その特性、連関構造性や展開相等々の把握・呈示を庶幾していることは、一読明らかであらう。（但し、制約の少ない論文に限る。）それ故に氏の抱え込まざるを得ない「問題は大きく、私のここでの自戒の一つは、錯雑した個々の事象に深入りしすぎないことである。」（磯貝著、128頁）と明記もしなければならぬ。（要約とピック・アップ方式で「錯雑した個々の事象に深入り」するという中途半端な従来論に対して、鷗外初期文芸評論の研究現状では、いくら「深入りしすぎ」ても「しすぎ」ということはない事を証明して見せたのが嘉部氏の著書であるから、皮肉な対照と言うべきか。）

△森▽は大きく拡がりもし、又縮小もするのであるが、後者の場合でも、鷗外専門の鷗外不勉強家や蠅集する研究対象にへばり付いて

いる者を驚かせ、怖気づかせ、感謝させるに十分の検討対象量。それらをこなしての大局把握志向自体、まことに結構な試みで、としか評しようがないが、気がかりもある。

△森▽の解明を志向する論は、視野をでき得る限り広げての、共通項さがしと論理的整合に腐心せざるを得ない。並大抵の力で出来るものでない。又、力量があっても、勢い△森▽の特性に都合付けられた△樹▽として理解されてしまいやすい。裏返して言い足せば、一体、△樹▽のどの程度の理解の上に△森▽を見ようとしているのであるうか、ということになる。余計な気がかりと言われるかも知れないが、嘉部著と比較して読んだ者には、ほんくらでない限り、抑えられないことである。

磯貝氏が対象化せんとした「総体」なるものに比べれば、嘉部氏の論の対象となったのは微々たるものである。しかしながら、論証の説得力による確かな手応え故に、磯貝著への不信任は拭いがたいのである。

例えば、論及対象の重なっている「舞姫論争」や「小説論」によって比較してみれば、磯貝著での理解力の底の浅さ、甘さ、不的確さは明らかであるから。(具体的には、次節以降の嘉部著に対する各論の部分と注を参照されたい。)

又(嘉部著との比較でなくとも)、「第三期」(磯貝著での時期区分)の動きのうちに、「標準的審美学を高らかにかけた第二期の主張からの、一種微妙な転調を感じとる」に、例の「月草叙」の一文を挙げたのはよいとして、唯、転調現象の指摘だけに留まって、

何故そうだったかが問われず、従ってそのことに一言も触れていないのは、論述の上滑りき加減が窺えると言えようか。(この転調の何故に対しては、木村毅がヒントを与え、十分に重要性を弁えぬまま、若干、小堀桂一郎氏が触れ、谷沢永一氏によって、初めて分かりやすく論証され、その意義も浮かびあげられた。)その他、この期の鷗外に暗い私でも不満に思う点が少なからずある。この期に真に力のある人がちゃんと言評らしい書評を、磯貝著に対して、してもらえないものか。

別に、△医事評論▽関係での「第一回日本医学会論争」や「△傍観機関▽論争」に触れた論を見ても、伊達一男や谷沢永一氏の論に比べて、随分、物の見方の甘さが目立つのである。^⑦氏には、森鷗外の盲点、欠点、問題点が見えていても、大根のところで彼に寄り添ってしまいう自己を許容する「自己」に厳しく対し得ない、という感傷性が抜けきれていないのではないか。

以上のような点を考慮に入れると、磯貝著は、△結構な試み▽とは言えても△結構な結実▽とは言えず、凡庸な研究者の蒙を啓発する「啓蒙書」の役割として、何らかの意味があった、と言うべきではないか。このような上滑りの△森▽志向の奮闘は、「人並こえた鷗外の知性」(磯貝著の△あとがき▽の言、傍点筆者) △総体▽を対象化し得る「人並こえた」磯貝氏の力量に任せて、普通の研究者は、啓蒙評文ではなく、嘉部氏を見習って、先入観なしの徹底した、△文学▽△医事▽△軍事▽△私事▽等の「樹」「々」の吟味・検討をまず心掛ける研究論文を書いた方がよいのではないか。(た

だし、余り地道にやり過ぎると、啓蒙評文にマッチする国文ジャーナリズムに、なかなか目をかけられないかも知れない。その辺は各自勝手に工夫するか、あきらめておればよろしい。目をかけられない光栄というのも稀にはあるので。もっともほとんどが羨望と自己肥大妄想のない、まぜらしいが。少なくとも、鵬外研究に今後も多く、必要とするのは、「啓蒙書」ではなく、「研究書」であるから。

さて、ここで目を転じて、嘉部著での△樹を見て森を見ず△の内実であるが、嘉部氏とて△森△を見まいとしているわけではない。短絡的に△森△を見ようとしただけである。少なくとも、本書の段階では、△樹△の吟味・検討を適当にして、△森△を志向しようとしていない。むしろ氏の研究方法の特徴は徹底した対象限定と、その対象に執拗にくいさがり、切り込み、解明し、そして分明にする点にある。

従来、鵬外研究者が、問題意識や新視点を大仰にちらつかせ、△樹△の目立つところやさわりの一文にのみ注目して、時に前後の文脈無視や当り障りのない要約で事足りりとしていたのを、氏は△樹△の枝葉まで吟味・解析し、それが無意味な論及でないことを証明して見せた。(ただし、これは今のところ△舞姫論争△の研究が最も成功している例と私は思うが。思うに氏の方法は、論争文、問題ある改稿の文、典拠資料が意味を持つ歴史小説などには応用が効くであろうが、「一区切り」△△あとかき△の言△後の鵬外研究にどう△あの手この手△の方法を工夫されるか大変楽しみにしている。)そして、そのような方法を探りながら対象に呑み込まれなかったのは、親切批評、親切解釈を峻拒して、冷静に対象と距離を保

持し続けたからである。(これを文芸作品の研究でやることの難しさは確かにある。余り成功例を私は知らない。氏が避けているのは賢明であると思う。感動の裡には、如何ように排除しても感傷はつきまとう。感傷の意識的拒絶のかたちでも、逆説的に入り込むからである。)しかも氏は、今時珍重に価する、平明なことは的確に論述しようとする人である。△あとかき△で「正直なところ気の利いた表現など、使おうにも使っただけの能力がなかったのである。」と述べているが、本当にそうではないか、と毒づきたくなる程である。思うに△装う△ことの少ない人なのであろう。(単に不器用なのかも知れないが)

ところで如上のように△樹△を見て森を見ず△の内実を述べて来ても、結局のところは、研究対象をどれだけ読み抜いているかが肝心。それに氏のような方法を探った場合、論者主体を充実させ、△あの手この手△での解明に、どれだけ手を尽くし調べたかが、達成度の基準になる。△樹△に対象限定しても、論者側の調査に視野を狭くする必要はないからである。

そこで次節以降では、右の検討を、乏しい能力しぼりだし、試みていきたい。

尚、次節以降の各論は配列順に論述しないので、紹介も兼ねて、目次を次に掲げておく。

「小説論」改稿の意図と方法

「小説論」の論理

作品批評における鵬外の批評意識

舞姫論争の方法

舞姫論争の論理(一)

舞姫論争の論理(二)

舞姫論争の論理(三)

舞姫論争の論理(四)

舞姫論争の論理(五)

「レッシングが事を記す」改稿の意図

諸家の鷗外論に対するいささかの疑念

再び諸家の鷗外論に対するいささかの疑念

三たび諸家の鷗外論に対するいささかの疑念

あとがき

二

「舞姫論争の方法」(初出は、「舞姫論争についての一異見」と題して『大阪樟蔭女子大学論集』八第七号、昭和44・11・1に発表。)は、本書収録論文中、「執筆・発表年次ともに最も古いものである。」という。「焼却処分」されたという卒業論文「森鷗外論—歴史小説と史伝」を別にすれば、嘉部氏の鷗外研究出発を記念する論ということになる。氏にとって「思い出深い論文」になったらしいが、私にとっては、文字通り「衝撃論文」となった。唯、私は公表直後に読

んだのではなかった。三、四年後であったと記憶している。せずともよい、ある不幸な共通の体験故の奇縁から、氏と知り合った後のことである。私にとっては不幸中の幸でもあったことになる。

一読までの事情はともかく、私はこれは画期的な論文だと思った。「舞姫論争」研究史上は無論である。又、今後「舞姫」論を書く者で、この論文に言及のないのは、「贗物」を平気で提出できる恥知らずだと、心中秘かに思っていて、行末を見守って来た。(現在では、「舞姫論争の論理(一)〜(五)」を含めて如上のように思っているが)結果、光榮なるかな、見事な黙殺のされよう。無知、怠惰、悪意、読んでうっかりならばんくらと心中でつぶやき、あきれ返り嘆くのも大人気ないので、記念に、(若干のお粗末反応の言及と共に)簡単な「黙殺史」を作成しておきたい。^⑤「黙殺史」は紙幅の都合上、注で示す。尚、時間をかけて完全に近いものも、いつか作成したいと考えている。)その前にまず嘉部氏の論そのものである。

この論を、氏は「講義中にテーマを思いつき」と「あとがき」に書いているが、それは「相沢謙吉の名による鷗外の論は、『舞姫』における相沢謙吉の造型と切り離しては考えられないのではなからうか。」(60頁)ということであろう。こういう「思いつき」を得た時、大雑把に言って、次の三つのことを問題にする必要がある。

一、八鷗外が「相沢謙吉」という名で反論していること✓に注目した人が、かつていたかどうか、又した場合自分の把握しているのと同様かどうか。

一、相沢謙吉の造型を『舞姫』から正確に読み取る。

一、論争方法として、どういふところで、どのように有効であるかを明瞭にする。

今読み返してみると、粗削りな仕上げであるが、それでも十分説得力のある論になっている。

最初の問題は、注目している者（長谷川泉）一人、気づかず、ほとんど触れていない者（臼井吉見、笹淵友二）二人の例を挙げているだけで、後に自ら補う（『舞姫論争の論理』注(6)、102～103頁）程度の先行への目くばりであるが、致命的なものではない。注目している者がいても、氏の把握しているもの（まさに△画期的な発見▽に相応しい）と雲泥の差があったからである。従って、先引のように提起し、後二者の問題検討へと進めていくことは順当な筋道となっている。

そこで二番目の問題を見ていくことになるのであるが、手堅く（逆に言う）と微妙な問題になっていく面は触れず）検討を加えて、次のような「造型」を導き出している。

：相沢は憎まれ役を一手に引き受けてでも友のためによかれと行動する人物として、そして「親分気分がよく出て居る」、いわば義侠心に富む人物として、そしていさか古い気質を持つ人物として造型されていると言って差支えないであろう。

（64頁）

無難な「造型」理解であり、「相沢謙吉」署名に鷗外が目論見んとした核を明らかにするに十分なものであろう。（唯、『舞姫』での造型に依存することは実に巧妙な手口であると同時に危険も伴って

いることを問題にしないのはどうしてだろうかとは思うが。）従って、あとは最後の問題の説得力如何んということになる。

氏は、「相沢謙吉名で反論するための前提」文になっている八書き出し▽での、「有利な条件」や「欠点」などを軽く指摘しておいて、「忍月に対する鷗外の反論は、必ずしも忍月の非難の順序によっていない。」という事実が、「舞姫論争」での鷗外の第二の大きな手口になっていることを問題にしていく。そのことと第一の大きな手口たる「相沢謙吉」署名での反論問題の核は絡まって、鷗外この論争方法が仕組まれており、それを見抜けないと論争そのものの本質も見えないからである。

忍月が本質的な面から論じる正攻法を採ったのに対し、鷗外は、逆に外面的な、枝葉末節の問題から論じるという、体をかわしての謀略法を編み出して、応答した。この△第二の大きな手口▽の意味するところ（氏は「鷗外が外面的な問題から反論を展開したのは、それなりに理由が考えられる。外面的な問題は第三者にとって論争の優劣が判定し易い。博識の鷗外にとっては、忍月を圧倒するためにも反論の容易な部分である。鷗外としては有利に先手を取ってゆけば、本質的な問題に到ってもし多少の遜色が見えても、全体とて有利だと判断したのではなからうか。」（73頁）と指摘し、又「もし一つ考えられるのは、忍月の論難の順序に従って駁論を展開した場合、相沢謙吉という署名によって効果を発揮することになる部分が、前と後に分断されてしまうという欠点が出てくるということである。このため、謫天情仙の評語の援用や、忍月の作品に対する

論難の効果が減殺される恐れが生じることになる。」(74頁)とも後に述べている。はともかく、忍月とは逆の、後に回された本質的な問題面で、先に見た『舞姫』における相沢謙吉の造型」と切り離し得ない。八第一の大きな手口▽が効果を發揮するというのであるから、絶対に見過しの許されない問題である。(括弧内で示した氏の指摘する八第二の大きな手口▽の意味するところを考慮すると、私には八第一の大きな手口▽は大バクチ的な、しかしながら実に巧妙な八最後の要塞▽といった感がする。)にもかかわらず、かつて見過されて来、今も十分というよりほとんど理解が行き届いていない。不思議なことである。(論証は直接、嘉部著69頁から73頁までを見てもらうとして)「相沢謙吉」署名での反論が効果を發揮する中核部分を、不思議な現状故に念押し引用しておく。

若し太田がエリスを棄てたるはエリスが狂する前に在りて其処女を敬したる昔の心に負きしはこゝなりといはゞ是れ弱性の人の境遇に驅らるゝ状を解せざる言のみ太田は弱し其大臣に諾したるは事実なれど彼にして家に帰りし後に人事を省みざる病に罹ることなく又エリスが狂を發することもあらで相語るをりもありしなば太田は或は帰東の念を断ちしも亦知る可らず彼は此念を断ちて大臣に対して面目を失ひたらば或は深く慙患して自殺せしも亦知る可らず臧獲も亦能く命を拵つ況や太田生をや其かくなりゆかざりしは僥倖のみ

足下は猶、此六妄を以て舞姫の瑕瑾を発きたりとおもへりや猶

天情仙は嘗て此記を評して云く太田は真の愛を知らぬものなりと僕は此言を以て舞姫評中の傳語となす舞姫を読みてこゝに思到らざるものは猶、情を解すること浅き人なり六妄なしと雖も未だ得たりとなすべからず況やこれあるをや

太田生は真の愛を知らず然れども猶真に愛すべき人に逢はむ日には真に之を愛すべき人物なり足下等は能く太田生に慙づる所なきか

以上見てきた論の中心たる八署名問題▽の他に、後半、先にも少し触れた鵬外の駁論順序の問題を含め、論争そのものの要について、氏は問題にしているが、後に真価を發揮する「舞姫論争の論理(一)〆(四)」の説得力ある論述(まさに食いついたらはなさないすっぱんのようにすさまじい)に比べれば、多少甘い論になっている。しかし、それは性急にまとめられているための、細かい点における論及不足や、若干の論証不足が主で、大筋、的をはずしていないから、全体的に見れば、粗削りであっても、やはり説得力のある好論文となっている。(これらも「思い出深い論文」故に「原型をとどめるように心がけた。」ことから来ている面が多かるう。尚、この論文の中核は以上の通りであるが、より細部の論理等は、注⑧で触れることがあるかも知れない。)

最後に、右の叙述裡で若干の疑点乃至不満を表明しているので、それを具体的に箇条書きする。

一、氏は「相沢謙吉」の八署名▽問題を前面に押し出し、論の中

核ともしている。そのこと自体異論はないのであるが、「舞姫論争の方法」(傍点筆者)としては△署名▽問題と共に△題名▽も、両輪に近い位置づけし、その上で△駁論順序▽問題を軸のような形で支えるように論じた方がよかったのではない。氏自身、後の論で△鵬外にとっては、「氣取半之丞」という署名が忍月攻撃に有利になっていることだけは確かである。

「相沢謙吉」という鵬外の立場が生きてくるのも、相手が氣取半之丞であるからである。▽「舞姫論争の論理」(191頁)と指摘し、本論稿でもその利用面は触れている。(忍月に逆用されるという、おまけつきまで氏は触れている)それだけに「氣取半之丞に与ふる書」(傍点筆者)という絶妙の△題名▽問題も強調しておいた方がよかったのではない。その場合、「舞姫再評」の、忍月が向きになって「氣取半之丞」をになう長い冒頭文を利用しない手はないであろう。鵬外の術中に陥って、忍月が論争を始めているのを指摘しておくためにも。

一、「相沢謙吉」署名を『舞姫』での造型に依存するということは、氏が明らかにしたように、論争を有利に導く鵬外の巧妙な戦術であり、実際に効果をもたらしたのであるが、こういう煙幕的△手口▽は一步誤まれば大変危険なものである。例えば、鵬外は、「氣取半之丞に与ふる書」冒頭での「相沢謙吉」がしやしゃり出る条件作り中の一節に「……嘗て一たび吾友太田豊太郎が舟中にて作りし記を読みたれど……」と記しているがこのことは自作擁護どころか、作品世界を傷つける逆効果にもな

りかねないのではないか。

藤本千鶴子氏は「舞姫」の構造の特質は、責任追求の目的の一つにしほりえないところにあるのであって、それらの間を堂々めぐりする、出口のない孤独な恨みの情念だけが、読者に理解を訴えかけるという仕掛けになっている」(傍点筆者)と、まことに鋭い指摘をしているが、「人知らぬ恨み」の△実情▽であろう。そして、そういう世界の裡に綴るという形になっている太田豊太郎の△回想記▽を、「相沢謙吉」が作品発表以前に読んでいたとなると、「出口のない孤独な恨み」の発想は根本的に破れてしまう。「鵬外漁史」の『舞姫』否定にもなりかねない。作品末尾の有名な一節も死語になり、本当の甘ちゃん物語になってしまふからである。太田豊太郎にとってアンビヴァレンツの微妙な心の問題対象になる「相沢謙吉」を、論争にしやしゃり出して駁論することは、結果的には効果を發揮し、最初はうまくいったのであるが、実に危険な賭けであったことも、確かではないか。そのあたりのことも考慮に入れて、「相沢謙吉」署名問題を論及していれば、より説得力があったのではないかと思うのであるが。

一、最後に、「本物」志向のためには、「……再評以下が新聞を發表舞台にしている点は注意すべきであろう。『しがらみ草紙』はもとより、『国民之友』と比較しても、読者は新聞の方が層が広く、数も多いであろう。このことは、第三者の判断が、より低い次元でなされる(中略)場合も考えられ、……」(74

頁)という甘い論述(せめて、『国民之友』「しがらみ草紙」、『江湖新聞』、『国民新聞』の大体の発行部数は示し、さらにその読者層をも、手さぐりでもよいから、さぐって見たという、姿勢を見せて欲しい。尚、再版の折には、山本武利著『近代日本の新聞読者層』(法政大学出版局刊)等が、明治二十年代の考察が手薄であるが、少しは役立つであろうことを付記しておく。⑩)や(鷗外がもし「謫天情仙の評語を真に『舞姫評中の傳語』と見ていたとすれば、『現代諸家の小説論を読む』(『しがらみ草紙』第二号)や、その他の論文での鷗外の文学観が根本的に覆ることになりかねない。)(76頁)という捨てぜりふ的脅迫文のような書き方はしない方がよいのではないか。(具体的に、どう「根本的に覆ること」になるのか、簡単にでも明示するように志向して欲しい)。

三

前節では、私にとって(衝撃論文)であり、又、未だ研究者一般に理解の行き届かない不思議な論文でもある「舞姫論争の方法」を、現在の私の眼で読み返して、思うところを、述べてみた。

本節では、右の論考と氏が同才能を発揮したと思われる(小説論)改稿の意図と方法(を中心)に考察してみたい。

「舞姫論争の方法」が「相沢謙吉」の署名問題に注目し中核とした論とすれば、この論は、(小説論)という題名の下にいった

(Cfr. Rudolph von Gottschall, Studien) ¹⁴⁾ というただし書きの意味(に着目し、改稿論を展開していったものと私には思える)。

共に、指摘されて見れば、何でもない目につきやすいことであるが、従来見落とされて来たことを氏が発見したのである。鷗外が思いを凝らしたものである。そして、氏は論として鷗外の(自己權威化)のための改稿の手際を、初めて私達の眼にさらけ出していったのである。

猫かわいがり、親切批評、文学ナルシズム批評等の甘ちゃん跋扈世界で、冷静な研究主体を保持した氏の本領発揮というところであらう。

ところで、論の検討としては、まず初出稿の問題から始めたい。問題は先引の(ただし書きの意味)になるわけだが、本論では、それは改稿問題に組み入れられている。従って、論の検討は改稿問題になって行く範囲内でなされねばならないが、多少はみ出るかも知れない。その際は、(小説論)の論理(にも触れて問題にしたい)。

「題名の下に(いた) (Cfr. Rudolph von Gottschall, Studien) ¹⁴⁾ というただし書きの意味」についての氏の考えを要約すると、以下のようになるであらう。(文壇的には全く無名であった(鷗外が、自身の(発言を強力に権威づける)ために、西欧人名コムプレックス計算の上、(ゴットシャルの威光)を巧妙に利用したもの、という風に。そして、その「巧妙」さについて、本文中一箇所だけゴットシャルの名前を使うことで、「ゴットシャルに拠っている部分がここだけだ」という錯覚)を起こさせるような仕組みや、依拠程

度を「きわめてあいまい」にする。*Cf.* を利用して、本文で「自らのオリジナリティーを主張しているかの感を与える」書き方をしていることなどを氏は指摘している。氏の炯眼をたたるだけで済ましておくべきかも知れないが、別の側面についての私見を敢えて付け加えておく。

氏の指摘する「ただし書きの意味」は、攻勢的な「自己の権威化」の問題裡で考察されているが、守勢的な面も考えられるのではないか。すなわち自己防禦的な面目保持の役割をも果せるように使われているのではないか。氏も紹介している神田孝夫氏や小堀桂一郎氏の指摘を考慮すると、鵬外の立論は、ゴットシャルに△おんぶにだっこ▽の「紹介」論。そのことをばれないように工夫すると共に、ばれた時でも面目丸つぶれにならずに居直れるようにも仕組まれているのが、(*Cf.* Rudolph von Gottschall, Studien) と解釈し得るのではないか。

又、再稿で削除されることについては、氏の指摘する「文壇の権威」鵬外の沽券が優先したのであるが、私の場合、それと共に四年間で文壇の知的水準を見定めた鵬外が居直ったと解釈する。

要するに、如上で私の言いたいのは氏の論の否定ではなく、鵬外が、攻守両面の一石二鳥を狙って、題の下の註記をしたのではないか、ということである。

序に初出稿問題をさらに付け加えておくと、氏には「医学士 森林太郎」という署名の仕方の意味について十分理解が行き届いていないのでは、と思われるのである。

本論から、右の問題に触れていると思われる評文を抜き出して示すと、△坪内逍遙のように「文学士」という肩書もなく、文学とは全く専門を異にする「医学士 森林太郎」が、文壇に産声をあげるための、まことに考えた、きわめて巧妙な方法であったと言えよう▽ (15頁) と「初稿執筆時は、鵬外は文壇的には全く無名であった。従って自らの医者としての立場を主張するとともに……」 (18頁) の二箇所になる。

前者の評文中には、「肩書」ということばが見え「医学士 森林太郎」(傍点筆者) も示されているのに、それらは繋ぎで理解されていないのである。氏はどうも「学士」という権威づけの「肩書」問題に盲目で、「医」の方だけに目が向いているらしいのである。それは二つの点から論証できる。一つは、それまで「医」に関連しての面からしか論述されていないのに、同評文がそれらをも受けての結語になっている点である。今一つは、改稿論に、その盲目さ加減が露呈している点である。すなわち、前者の評文で「医学士」という「肩書」を引用し書きとどめていても、後者の初出稿に対する評文では、「医者としての立場」という点からしか問題にされていないこと。(この点に関しては、△「わが医にしてこれを論ぜむも、あながち他人の領地を侵したるやうにはおもはれざるべし」も同様である。ここでは、明治二十二年一月の「医学士 森林太郎」を強調している。▽という書き方からも言えるであろう。) 従って、再稿論に狂いが生じてきている。再稿の題名「医にして小説を論ず」を、「あくまでも自己の発想によるもの」ということを印象づけた

め」の変更と解釈したのはよいとして、「初出を尊重するらしく見せるため医者としての立場を強調する」というのは如何がなものであろうか。「医者としての立場を強調する」ことが、どうして「初出を尊重するらしく見せるため」(傍点筆者)になるのか、と逆に問いかけて見れば、分かるようではない屁理屈文であることは明らかであろう。「見せる」のは読者にであらう。であるなら読者は初出を知っていないと、「初出を尊重している」という錯覚すらも起こり得ない。そして、初出を知っていれば、「尊重しているらしく、」(傍点筆者)見える筈がないのではないか。問題は次のように解釈すべきではないか。

「都合の悪いゴットシャル」と共に、「文壇の権威」になっていく再稿文での鵬外には、「医学士」(傍点筆者)の「肩書」権威も必要でないし、(収録のされ方を考慮すると)嫌味で場違いにさえるから、それは消去した。しかし、「医」の立場の強調だけは思惑があつてまだ末練があつた。それがあの「医にして小説を論ず」(傍点筆者)という題名になったと解釈すべきであらう。何故如上のように解釈すべきかは、初出稿の成り立ち問題の核と密接に関連している。

再稿文の冒頭部分で「今の歐羅巴にて盛に行はるゝ小説の一派は、医学に縁あるものなれば、わが医にしてこれを論ぜむも、あながち他人の領地を侵したるやうにおもはれざるべし」(傍点筆者)と鵬外は述べた。それを嘉部氏は傍点部分に注目して、△ここで、明治二十二年一月の「医学士 森林太郎」を強調している。明

治、二十五年における森鵬外なら、決して「他人の領地を侵した」などと思われる筈はないのである。▽(傍点部分)と指摘している。傍点部分はその通りであらう。(前半は、氏の論だと「医学士」の「医」の立場だけで十分であらう。)だから私は、このことばの再稿文での役割を、謙虚を装った牽制と理解する。しかしこのことばは、初出稿での鵬外の思惑の吐露になっていることを見抜く方が重要であると思うのだが。すなわち鵬外は、初出稿を、「他人の領地を侵す意識の上に作り上げていった、ということである。従って「小説論」はその場合の最善策を練り上げて作られたものと理解しないと、甘ちゃん論になる。既に嘉部氏によって指摘されたことは略すが、問題の中核は次の点にある。

「小説論」はゾラの小説論否定が中核になっているが、鵬外が文学活動の出発点で何故ゾラを選んで小説論問題に取りあげたかという、その最大の理由は、彼の理論が「医学に縁あるもの」(初出では「其源を医学に発したる」ものとして強調されている。)であったからである。「医学士 森林太郎」が「文学」という「他人の領地を侵し」て論ずる場合に、ゾラを祖上に載せて評することの効果の程は、容易に察せられよう。(尚、嘉部氏は、△「小説論」の論理▽で、△「開明世界に噴々」たるゾラを紹介し、その上でこれを否定する。さらにクロード・ベルナルまで持ち出し、医者としての(つまり素人としての)立場も強調し、にも拘わらず文学に対する造詣が深いことを読者に披瀝し、文学を論じることが決しておかしくないことを示すのである。日本でようやく知られ出した「開

明世界に嘖々たるゾラを否定することは、論者の見識を示すことになる。Vと指摘している。私はこれは二次的な効果法の指摘・強調という、主客転倒論と思う。小堀桂一郎氏の指摘された、坪内逍遙の『小説神髓』念頭論は、鵬外の自慰的満足論としてなら理解できる^⑧。しかし、実際の効果を狙った上でのこととして考えている私見の方が、△最大の理由Vとしては、より説得力をもつのではないか。

以上の通りとすれば、「思惑」は論の中核であり、それを再稿文の時点では、まだ捨て難かったのである。しかし三稿では、氏の指摘する通り△文壇の神鵬外にとって、医者立場を強調することは、文学が余技ととられかねない危険を含むのである。とすれば自らを医者とする文章を削除することは当然Vとなったのである。

(他に改稿論中、氏が初めて指摘したことなどがあるが省略する。)

ところで、右に見てきたことの補論として、氏の△「小説論」の論理Vで呈示している問題を取り上げておきたい。この論で採った氏の方法は、「舞姫論争の論理(一)(五)」で既に試みている、「逐語的に検討」することである。そしてそれを意味あるものに行っているのは、親切批評・解釈の峻拒である。多くの鵬外論が暗黙裡に「あの偉大な鵬外」を前提とし、訳がわからぬことを書いていても、意味を何となくみ取るうとし意義づけようとする方向で論じているのに対し、氏はそういう御親切論を、研究者として自らに禁じたのである。そして、冷徹な眼で「逐語的に検討」した結果、△「小説論」が実質的にはほとんど何も言えていないVことが分かった。先に見て

来た△意図と方法Vの実態に呼応する当然の結果でもあろう。そして氏は論を次のように結んでいる。

「小説論」は、ゾラを否定している。しかし、これは鵬外が十分にゾラを理解した上での否定ではない。そうすると、この論を文学史的に見て極く初期におけるゾラの日本への紹介とか、あるいはゾラ流の自然主義文学の否定がなされたとかいうような位置づけはできないのではなからうか。まして、鵬外が後年の日本的な自然主義文学を予見しての警告であるなどという見方は見当ちがいのいうべきであらう。

耳の痛い研究者が多くいるであらうが、先に示した私見を考慮すれば、右の論の正しさは確定的と思われるが。今後の文学史、概説、比較文学等々の著述を楽しむにしている。(最後に付記として、磯貝氏の論を批評しておく、128頁から130頁に展開されているのは、最初に常識的な「小説論」の内容概説、そして改稿問題に留意する必要性を説きながら、それについて氏が呈示し得たのは、的はずれの「簡約化原理」や、「論理整備の一過程」というどうでもよいような指摘だけ。文脈無視の△さわりV引用だけで、どうして「論理」が問題にできるのか不思議だが、「総体」志向は、訳がわからなくても理解されるのかも知れない。)

四

「小説論」に関する氏の論については、まだ若干触れておきたい

こともあるが、残りの論の問題へと筆をすずめていきたい。

本節以降、力量、紙幅、気乗り、締切り等々のマイナス複合事情もあって、(もっとも大きな理由は、力量不足で、余り何も言うことがないというのが実情であるが) 残りの論に対しては、論証抜き感想程度にとどめたい。収録順に問題にしていく。

「作品批評における鷗外の批評意識」は、前記した昭和五十四年度日本近代文学会春季大会の研究発表文を、態勢立て直しの上、問題検討整備に努め、論の補強と若干の取り繕いをもって、仕上げたものである。

実のところ、元の口頭発表を聴いた時、気負い過ぎて浮き足に나っているという印象をもった。その後それが機関誌に活字化された時読んでも、平生の氏に似合わず、十分に書いたものではなく、問題意識先行型のどこにでもころがっている論だと思った。(もっとも、ああいう席上ではハツタリが必要で、要するに実質のないお祭りの会に相応しかったかも知れない。) さすがに本論では、本来の氏の姿に戻っているが、それも四節までで、五節の「鷗外の評論の權威が文壇を支配したため、かえてせっかく芽が出て成長しかかっていた文芸時評の発育を抑えて文芸時評を不毛にしてしまったのではないかと思われるのである。」(55～56頁) という問題提起に関わる論は、氏の△意地▽だけを見た。いつのまにか「作品批評」「創作批評」「文芸時評」と勝手にことばが変わるのに抵抗を覚えるし、紹介されている『文学界』の三つの記事でもって、何故氏の「仮説を証明する資料を発見したので、(△あとかぎ▽の言、254頁)

と揚言できるのか、私には了解し難い。仮に当時の第三者が、鷗外によって創作批評が不振になった、とはっきり言っている記事があったとしても、それが「証明する資料」になるのであろうか。

ここでの氏の論理は飛躍に過ぎる。こういう「仮説」は、まず被害者と思っている者からあたっていくのが実証の鉄則ではないか。被害者の実態を徹底的に明らかにしないで、加害者と、(問題提起であらうが、仮説であらうが) 決め名指しする遣り方は疑問に思う。

最後に少し気になった言表を指摘しておく。「(……決して論争で負けていたのではないが、世間の印象はまたちがっていたようである)」(傍点筆者、54頁) ここでいう「世間」の実態はあるのであろうか。他の論でも類似した言い方が窺えたが、注も何もなかった。氏らしくない言表と思う。

次に「舞姫論争の論理(一)△(四)」に移りたい。この論文は、△あとかぎ▽に△「舞姫論争の方法」と相補関係にあるもの▽とある如く、本来なら先に「舞姫論争の方法」を検討した時に関係づけて論じなければならぬのであろうが。部分のあら捜しならともかく、全体を論じることが、私の力では至難。しかも要約してみても余り意味をなさない論と来ているから始末が悪い。そこで敬して遠ざけたわけである。翌月・鷗外双方の論理を綿密に解析していった、その△読み▽をここで逐一検討することは、とても私にはできない。そこでまことに勝手気儘ではあるが、今回この拙稿を書くために読んで思ったことを思いつくままに箇条書きする程度にしておきたい。

一、私は、先に「舞姫論争の方法」を「衝撃論文」と書いたが、この論文を、コピーにとり、書き入れしながら、じっくりと(一)と読んでいくうちに、不思議な感動を覚えた。(この論文は読むのに努力がいるのが瑕瑾)そして氏の木領はここにあるのではないかと思った。と同時に、私がまだちゃんばらんにしか読んでいない時に、氏が「本当は「舞姫論争の方法」より、「——論理(一)(四)」の方に自信がある。」というような意味のことを言われたのを思い出し、「さもありなん」と思った。

一、この論の論及法は谷沢永一氏の「坪内逍遙・森鷗外対立の根源」(『明治期の文芸評論』八木書店刊、昭46・5/所収、初出は、関西大学『国文学』第二十七号/昭和三十三年四月/に掲載、原題は「逍遙鷗外対立の根源」である。)から学んでいることが多いのではないかと思った。学び得ていないのは、△読ませる力△だけではないだろうか。

一、△あとがき△で、氏は「……鷗外否定論者ないしは鷗外批判者と見られているようであるが、私の鷗外に対する見方は、あくまで鷗外の評論を客観的に分析した結果であるので……」(233頁)と述べているが、(寡聞にして私は、誰からそう「見られている」のか知らない。そういう風に見ている者がいたとして、それらの人達は、嘉部氏の論文一編すらも、ともに読んでいないゴロツキ噂生きがい連と思う。私事ではあるが記す。私の友人が関口安義氏から聞いた話によると、拙著のこと

を、笠間書院の故池田猛雄に「何故あんな程度の低いのを本に……」と言った、或る東京在住の研究者がいたそうである。それに對し池田が「長谷川泉氏から無理に頼まれ断りきれなくて……」と、無節操、嘘八百のお粗末極まりない答え方をしたという。この話を聞いて少し経てから、二つのことを思った。一つは、このことを友人に話していた時点で、関口氏が私の論文一編もまともに読んでいなかったであろうと確信する。何故なら、その時同席していたという海老井英次氏が、△他の論は知らないけれど、「羅生門」論は面白いと思う△と答えたというし、私の話題は芥川に関しての時に当たったことである。当然と言うべきか、関口氏は、私の「羅生門」論に対し、一言もなかったという。今一つは、「或る東京在住の」という、余計なお世話の馬鹿者が自然に判明すれば、その業績の中味の「程度」を、是非拝読し、その「程度」論を懇切丁寧に示して公表する所存である。どうせ「或る……」馬鹿者は、私の論など一編もまともに読んでいないだろう。しかし、その者のために敢えて言っておくが、拙著はこの論の文脈の中で位置づければ、「贅物」中の水準以上のものと、今も思っている。この論の(97、130、132、168、170頁等々中の)評言を見るだけでも、そのことは瞭然とするであらう。

一、鷗外の仕掛けたトリックを一つだに見逃さずの感さえ覚えさせられる、その詳細極めた論及のねばり腰は、氏の一体どういう精神構造が支えているのであろうか。「舞姫論争」の問題一

つに關わつて四年。石の上にも三年というが、「眞実」分明のための根氣の程が不思議でさへある。根氣より無勉強の色氣盛りが横行している学界では。

一、この論によつて、不当に貶められきた忍月の論が、(その反動の買いかぶりを免れて)初めてありのままに論評対象となつた。

一、私は、この論文(「舞姫論争の方法」も含めて)を熟読して見て、「鵬外がこの論争でとつた態度は、どこまでも忍月を圧伏することであつた。そのためには殆ど手段をえらばなかつたとさえ言える。相手の論旨の曲解、論理のすりかえ、論旨の分断、あげ足取り、外国作品の援用(それも必ずしも適切でないもの)等々、いくつか解明できたつもりである。このように、論争としては殆んど勝つことだけに焦点をあわせた鵬外の「氣取半之丞に与ふる書」「再、氣取半之丞に与ふる書」が、『舞姫』の自作自解としての役割を持つとは考えられない。むしろ部分的には鵬外の真意も加わっているだろうし、自作自解の部分もあるだろう。しかし、『舞姫』を論ずるに際して、無条件に「氣取半之丞に与ふる書」「再、氣取半之丞に与ふる書」を引用するのは危険である。もし『舞姫』論に引用しようとするならば、その論理と方法とに關して十分な吟味を加えることが必要となるであらう。」と氏が述べていることを、賛意をもつて納得できた。そして、素直にそう理解できたことを誇りに思っている。

一、この論文が、谷沢永一氏の炯眼によつて、産婆役、子守り役、看視役、推薦役の至れり尽くせりのもとに成つたことの幸いを痛切に思う。と同時に、谷沢永一氏の厳しい眼の中で、新しい論文を書いていくことの苦痛を、今後氏は味わうことになるかも知れない。しかし、そういう「苦痛」自体が生きがいのある学究生活を保障してくれるであらう。

一、最後に磯貝著の176頁から181頁にかけて触れられている「舞姫論争」評(「鵬外の審美批評」という論の冒頭部分にあたる)をおおまかに見ておく。

まず八森鵬外は、石橋忍月との有名な論争文「舞姫に就きて氣取半之丞に与ふる書」(明二三・四『しがらみ草紙』)において、雑多に言いかけた忍月の難を六妄に整理して、そのすべてをあざやかに切り捨てている。(中略) 忍月文は、ここであつて、類例のない分析批判のメスを受けたのである。√(傍点筆者178頁、傍点部分は初出では各々次のようになっていた。「……破碎している。」「……ほとんど完膚なきまで分析され、批判しつくされていると言つてよい。」要するに、取るに足らない改稿である。) という判断から始めている。この評文については、既に嘉部氏が八あとがき√で触れている。だから嘉部氏の論を読めば、磯貝評文をどうすればよいか分かる。手直しして示しておく。「……そのすべてをあざやかなトリックを駆使して切り捨てようとはした。(中略) 忍月文は、ここであつて類例のない汚い手で誤魔化し論のメスを受けたのである。」と。

さらに鵬外が「其妄六つ」としてしりぞけた忍月文を、△「舞姫」に強く情を動かされた結果、かえって、エリスを捨てた太田を許せなくなっている、その青春ロマンチズムが伝わってくる。かれは、多分、その気分を、批評家的擬態をもって、作品内論理の問題に転移させただけのことである。▽（17頁）と評している。「気分」にひたって感傷的になっているのは、忍月より磯貝氏の方なのではないか。

又△例の、「太田生は真の愛を知らず」という、その後「舞姫」研究をにぎわすにいたる、有名な発言▽を問題にして、次のように述べる。△そして、そのところで、鵬外は一種の破れ目を見せたように私は思う。もしこのことばをそのままうべなうとすれば、「舞姫」内の葛藤はそれだけ底の浅いものになり、つまりは、忍月の批判を裏書きすることになりかねないのである。この発言は、かなり唐突で、作品内論理の上に立つというよりは、作者の原モチーフの一部のもれ出たものと見るべきで……▽（180）氏が嘉部氏の指摘した「相沢謙吉」署名問題を考慮に入れないから、如上のような頓珍漢な論を展開するのである。

最後に、△「レッシングが事を記す」改稿の意図▽であるが、実は余り言いたいこともない。

既に、△「小説論」改稿の意図と方法▽で使った方法の応用篇というべきものである。それに「石橋忍月の研究家でもある氏にとつて、忍月攻撃に関わる問題を取り扱うのは、お手のものであったで

あらう。

以上で、嘉部氏の「初期文芸評論」に対する研究の検討は終る。目次でも一行あけられて記されている、「諸家の鵬外論に対するいささかの疑念」、「再び諸家の鵬外論に対するいささかの疑念」、「三たび諸家の鵬外に対するいささかの疑念」については、私がここでも何か言うべきことも少ない。

唯、長谷川泉氏と論争になった、「独逸日記」の原拠、漢文体日記『在徳記』説の問題は、その印象だけ述べておく。

嘉部氏が、肯定でもなく否定でもない、推定説とすべく、論を展開したのに対し、長谷川氏は、折角決定づけ定説となっている説を元の木阿弥にすると解したのかどうか、従来の自論の域内のものを繰り返し、自説を信ずると表明したものと、私の眼には映った。この論争ならぬ論争後、唯一つ言える確かなことは、どちらの説を採るにしろ、一方のみを自明の前提のような取り扱いはできないということである。

その他に関しては、何とお粗末な論が多いことよ、とあきれかえると共に、若干氏の論の突っ込みの足りなさ、論証不十分が気になる問題などもあるが、疲れきっているので、もう筆をおきたい。

節を改め、まとめをしなければならないところであるが、余力がない。

一つだけ言えば「本物」志向に百パーセント達成度などないし、そのことは嘉部氏の著書も、見られてきた如く、例外ではない。しかし、嘉部氏の著書の大きな意義は、後学の者に確実な土台を与え

ているということである。そして、「本文」を読む上に有効な論になっていることである。その論文の対象になっている「本文」読みは何の役にも立たない、華麗なる空疎文仕立ての「研究」が横行している時、本書の価値は計り知れない。

注

① 「理論」となっているが、「論理」の方が正しい、との嘉部氏の言による。「編集者附記。中扉および奥付のみ正しく「論理」となっている。」

② 「仮説」の例証になるようなものは何一つあげていないし、論は前半と後半分裂しているものを強引に結びつけたものと思うからである。

③ 氏の述べている否定対象なら、何も磯貝氏の論だけでなく手近に多くある。それを二度も引用した上で問題にしている。「異例」と評してもよいであろう。

④ 磯貝氏の著書の方は、頑張っている偉大な啓蒙批評家、半ば以上が目につきやすい商業誌等、被害者の実感に触れた部分への異常な反応ぶり、書評ありヨイショあり、というところか。

嘉部氏の著書の方は、好戦的権威主義者、大半が勤務校の雑誌、お粗末言及と紹介程度がやっとこさ(ただし、谷沢永一氏だけは孤軍奮闘)、未だ書評もなし、^{*}というところか。

⑤ 拡大すれば、「日本の知性の歴史そのもの」まで考慮、縮小すれば「医事活動と文学活動とを同時に展望」する、というこ

とになる。前者など気が遠くなりそうであるが、読んでみれば、実質的には何も述べていない。

⑥ 木村毅「明治大正文学夜話(旦那芸の極地―森鷗外の場合)」「解釈と鑑賞」昭41・3、のち「^{学夜話}明治文 近代精神と文壇」至文堂選書、昭50・11に収録)、小堀桂一郎「妄想」の精神世界」「森鷗外の世界」講談社、昭46・5、尚、初出は「妄想」註解」と題して昭和四十四年から四十五年にかけて同人雑誌「Neue Stimme」第十号から第十二号まで三回に分けて発表」されたという。筆者未見。谷沢永一「鷗外梶牛対立期」『樟蔭国文学』第17号、昭54・10、尚、この論は、昭和54年5月19日、大阪樟蔭女子大学で開かれた、日本近代文学会関西支部準備会で発表されたものを、録音テープから文字に起こしたものである。又、木村毅は「第十六章早稲たんぼの美学―心理派美学の転移―」『比較文学新視界』八八木書店、昭50・11)でも触れている。

⑦ 伊達一男「9日本医学会論争」(『医師としての森鷗外』八續文堂、昭56・2に所収)、谷沢永一「鷗外『傍觀機関』の論理構造」『明治期の文芸評論』八八木書店、昭46・5に所収。上記両論と磯貝著での論と読み比べれば、磯貝論がいかに甘いか判る筈である。もっとも伊達氏の論も、やや「偉大な鷗外」への感傷が抜けきれていないが。磯貝氏は鷗外を現実論として突っ込んで問題にしていくことに抵抗があるらしいのである。

⑧ 初出が、前記の通り昭和44年11月1日になっているので諸条

件考慮の上、二年程のちの、(切りをつけて) 昭和47年公表以降の主なものに触れる。一人で何篇も公表している者もいるので、執筆主体の、五十音順に列挙する方法をとる。尚、紙幅もあって、簡単なコメントと問題箇所引用程度にとどめる。(重要論文であっても、「舞姫論争」文に触れておらず、嘉部氏の論と接点のないものは特別のものを除いて省いた。)

- 飛鳥井雅道氏の「第二章『舞姫』の構造」(『鵬外その青春』△角川書店、昭51・12・10▽所収)。この論は、既に嘉部著所収の「諸家の鵬外論に対するいささかの疑念」の対象になっているし(221~222頁参照)、追いつちするの馬鹿々々しくなるお粗末論故、挙げておくのみにする。「本論叢」は、「日本文化研究の礎石を築くことができればと念願」してのものという。そこで「日本文化の会は、その目的を達するため、論叢の内容を検討し、水準、精度について編集の責任を果たしたいと考える。」そうである。しかし、「その方法」が「一篇ごとに委員の解説を付する」というのであるから白ける。(ちなみに、飛鳥井著の森谷勉久氏の「解説」が、「責任を果た」せるような代物でないことを私は断言してもよい)。会のお仲間の「解説を付する」ことで「責任を果た」し得ると考える、そのお目出たさは無類。唯、さも意義ある研究と見せかける、権威づけ「方法」としてなら分かるが。このシリーズは「刊行のことば」までピントがズレている。

- 磯貝英夫氏の「舞姫」の「鑑賞」(『森鵬外』△鑑賞日本現

代文学)①、角川書店、昭56・8・30▽所収)。この注の部分が遅れたため、すべりこんで来た論で、最新のものである。本の帯には(他の本も含め全て)「最新の研究成果をふまえた文学鑑賞への手引き。」という宣伝文があるが、この磯貝著の鑑賞部分を通読してみても、宣伝文とかけ離れた不勉強の書だと思つた。機会があれば、他の「鑑賞」を論じることもあるであろうが、今は『舞姫』のものだけにしておく。「実世界と想世界―愛の性格」という小見出しの付してある部分を、嘉部氏の論を念頭において読んでみれば、私が「不勉強の書」と言つた一端は理解されるであろう。特にとばけた部分を引用する。△：「実際に、石橋忍月が太田の不徹底を責めたときには、鵬外自身が、「太田生は真の愛を知らず。然れども猶真に愛すべき人に逢はむ日には真に之を愛すべき人物なり」(『舞姫に就きて気取半之丞に与ふる書』△筆者注―初出の題を記して欲しいものである。▽)という、まことに興味ぶかい回答をしている。▽嘉部氏の指摘した「相沢謙吉」署名問題に一言も触れず、こののち論は、引用のことばを論拠に展開していくのである。「……もし、忍月に答えた鵬外のことばをさらに問いつめたら、おそらくは、この相沢のことば(筆者注「人材を知りてのこひにあらず」)が返ってくるのではないか。」と述べているところなどは△劇的なお粗末▽と評すべきか。△まさしく、太田は、「真の愛」に出会ったのだが、それを、太田のみならず、作者も、究極的に「真の愛」でないと考えていたとしたら

……。一見、単純、明快である「舞姫」という作品についての論議の紛糾は、この、作者の基本的思念のあいまいさによると言つてよいであらう。√という頓珍漢論。その他の箇所でも同様のお粗末引用と論があるが、もう十分であらう。嘉部氏の論に対する反論のかたちでもよいから、「考慮」の上、もう一度磯貝氏にまともな「舞姫」に関する論を書いて欲しい。

○伊藤敬一氏の『森鷗外―その若き時代―』（古川書房、昭56・4・1）所収の『舞姫』に関するもの（131～158頁）。八あとがき√に言う「先学の研究に負ふことなくしてこの書はならない。」は、本書に限る限り、外交辞令の、謙辭と理解する必要なし。まさしく目立つた「先学の研究」を一応勉強はしましたの三流書。従つて、『舞姫』に関する論も、どこを引用すれば、氏の論になるのか、見つけ出すのに苦労する。又、目立つたところに掲載してこなかった嘉部氏の論が黙殺されているのは当然だし、その結果関連する問題も、お粗末であるのは自明。

○大里恭三郎『「舞姫」論』（「常葉女子短期大学紀要」第6号、昭49・3・25）。すぐれた論であると思つた。私は氏の読みと異なる部分もあり、もし将来「舞姫」論を書く場合、その点に疑問を呈して論じることにならう。しかし、今後の『舞姫』本文の読みは、氏の論を無視したままで論じるのはよくないのではないか。この論文自体が、嘉部氏の論以上に黙殺されていることを、私は惜しむ。（要約して誤解を与えるより一読

を薦む。唯一読の際、まとめやさわりの言に、惑わされない方がよい。ちょっと勇み足表現もあるのだ）そして、大里氏自身が嘉部氏の論を考慮されなかったことは、さらに惜しいと私は思うのである。

○奥野政元氏の『「舞姫」論』（「活水論文集」第二十二集、活水女子短期大学、昭54・3・31）。この論文は八読み√において多くのすぐれた点があり、氏の才気が窺える。しかし、研究者として基本的な姿勢がちよつとお粗末である。たとえば、氏の言う「加筆訂正の問題」を取り扱って、各版の原文に自分の眼であたらす、他人の仕事におんぶにだっこ。だから次のような初歩的ミスをするのである。すなわち、第一節の大半を、初出の「国民之友」、「国民小説」『縮刷水沫集』を参照せずして論じている阿達義雄氏の欠陥研究に頼りながら、その末尾には「初出の以上の特色とは、密接な関係にあると言つてさしつかえないであらう。」（傍点筆者）と言つてのけられる点。又、越智治雄、浅井清氏の論と阿達義雄氏の論を取りあげる場合、その論の基礎的欠陥と、相違をまず把握して問題にすべきなのに、そういう意識も動いていない。自分の眼で草稿文、初出文、「国民小説」文、「美奈和集」文、『改訂水沫集』文、「塵泥」文、『縮刷水沫集』文、これらに直接あたるといふ基本的手続きを怠つて、「加筆訂正の問題」を取り扱うような、お手軽、怠惰な姿勢は厳に戒めるべきではないか。その他の氏の論からして、当然触れるべき論文も見えないようである。嘉部

氏の今問題にしている論とは接点が偶然ないが、他の論ではある。しかし、氏は多分嘉部氏の研究を一篇も読んでいないであろう。読んでいたら別の『鷗外の初期文芸理論』ノートという不勉強極まりない論など公表しない筈である。同大学で逍遙側からではあるが、基礎のしっかりした、すぐれた「没理想」論争を論じている石田忠彦氏の研究があるから、余計に目立つのである。私は石田氏の仕事が論争そのものまで論が及ぶのを鶴首している者の一人である。

○ 勝田和學氏の『舞姫』の時間―授業のための一視点―
 「古典と現代」43、明治書院、昭54・10・20。「一人称回想形式」という作品構造に注目し、回想する「現在の意識」が過去叙述裡に色濃く投影される点を考慮すべきである、と主張する論である。回想形式の重要性を指摘していた三好行雄氏の説を受け継ぎながら、論としては若干深めている面もある。(たとえば△：三好氏の言われるごとく、「すでに完了した事件はけつして動かない。」しかしその事件の持つ意味は豊太郎の内部で動くのである。▽(傍点筆者)という理解の仕方。)

「現在の意識」考慮の上、過去叙述裡の、特に「弱き心」問題に着目し、「△弱き心▽の強調は一見、自虐的で自己に、誠実に見えながら、その実、自己の責任を回避するための隠れみみになっている」と理解する。そういう「理解」の上に、山崎正和氏の△荷風より鷗外が責められるのは心外▽（勝田氏の言表）という論を、「鷗外はともかくとして、豊太郎が責められるの

は功名心のために女を捨てたということより、誠実を装いつつ言いわけがましいことを言っていることにあると見るべきであろう。」として新見呈示している。「回想形式」の問題を本格的に取り組んだ論であるが、太田豊太郎の責任問題から見過ぎており、ちょっと単純に作品が割り切られている。(氏は、回想する「現在の意識」を強調しながら、その現在の太田豊太郎の心の現状に対して、実に単純な読み方をしているのである。

たとえば、△「嗚呼、いかにして、此恨を鎮せむ。」という豊太郎の叫びは、彼の(筆者注)「回想文」執筆の動機を端的に示している。▽(傍点筆者)と言うが、果たしてそうか。私には氏の「過去を清算する」という先入観から来る、誤読であると思えないのであるが。前記大里氏のような柔軟性が欲しいところであるが、大里氏の方も勝田氏のような問題視点の考慮がないため、お互いに説得力の面で弱いところがある。だから結論が極端に対照的になっているのである。ところで、勝田氏も嘉部氏の論を抜きにして論じており、角川(日本近代文学大系57、『近代評論集1』)ので、ため注射を引用しているところなど二重のお粗末になっているのである。尚後記する佐々木氏の論ぐらいは読んで問題にすべきであるとも思う。

○ 蒲生芳郎氏の「第一章帰ってきた鷗外―『舞姫』前後」(森鷗外その冒険と挫折)春秋社、昭49・4・30)。氏自身の先行論である『舞姫』私見―その出発時における鷗外の『文学』の構想―(『文学』昭42・10)は、「通説にさから」うことに

急で、その点が目立ってしまったという論だと思った。従って、作品を「倫理不在の悲恋物語、審美的ロマンス」とする、その△読み▽自体が、論の否定対象にされている「人生的視座」からの△読み▽の裏返しに過ぎず、所詮同根、同じ穴のむじな、という風に私はずっと理解してきた。(しかも、第二節での引用文に対する誤読も目立つ)又、第三節で△孤独なエリート」の「まことの我」のゆくえ▽を、上記の論が「内発的結果」となるように論じ、紐帯確認しているのもやはり「通説」の裏返しの論で、もう少し突っ込んで欲しい。「講座派」理論の「近代日本」理解を揺曳させながらも、新味ある異見呈示しようとする努力は涙ぐましく、学界用論文としては申し分のないものである。ところが、本論は、一応、如上の先行論を下敷きにはしているが、微妙に変容した面があり、反措定論の嫌味も薄らいている。そして作品論部分の中核は、三木清の「感傷」論を駆使したもので、△感傷的▽に読めば、かなり説得力ある論になっている。(前記先行論の誤読を自ら部分的訂正している箇所もあったりして)しかし、冷静に読めば、「舞姫論争」の忍月、鷗外文の理解も狂っているし、「感傷的な人間」という固定的な見方も、納得できない。「感傷」状態に人間がなることは分かるし、陥りやすい「弱き心」の者もいるであろうが、「感傷的な人間」というのが客観的にいて、「人間」理解の問題で、それに帰していくというのは高をくくり過ぎていないか。その高のくくり方は相沢謙吉の「人間」理解の仕方に似ていなくも

ない。『舞姫』が読者の心に、人間の「感傷」の問題を通して、訴えている面があることは免れないが、氏の論理には次元の異なる点が露呈しているのである。尚、嘉部氏の論を無視していることは、「舞姫論争」文のお粗末な△読み▽がおのずから示している。

○小泉浩一郎氏の『舞姫』論—鷗外出発期の課題—(評言と構想)第五輯、昭51・4・20。何を論じて同じ抽象的な顔がしゃしゃり出る、氏の金太郎飴論文の一つ。「講座派」理論の「近代日本」理解をつまみ食いしながら、「明治の絶対的矛盾」を「矛盾」として深く認識し、そのまま身を横たえて体現することを態度決定する、いわば見切りをつけた体制内ハムレット鷗外の評価に腐心する、御苦勞な論に何を述べればよいのか。先入観と抽象論が役立たぬことが目立つのでできない、「渋谷抽斎」の注釈のような仕事を期待すると挨拶を送ればよいのか。それとも本論に使われている「近代的自我」、「半封建的官僚機構」、「現実の官僚機構」、「明晰な近代的自我意識」、「近代的主体」、「日本的近代」、「封建的官僚機構」、「明治の絶対主義的現実」等々の△ことは▽を、借り物で寝そべておらず、自分のことばで分かりやすく具体的に説明し、それが『舞姫』論にどう必要か説得的に論じて欲しい、と述べればよいのか。しかし、「測鉛」一語に△三好行雄氏▽の名前を付して肯定論の裡に組み入れ、谷沢永一氏の論には「決して」、山崎正和氏の論には「全く」付きの否定論を示す△妙▽を心得、又、

別の「近世から近代へ―『舞姫』の恋愛 忍月・鵬外論争を視座として―」（『武蔵野文学』第二十六集、昭54・1・10）という論では、「相沢謙吉」署名問題を早くから指摘していた嘉部氏の論を、△絶妙△の注の付け方で片付ける手際を使用できる氏に、何か述べるのも億劫である。嘉部氏は、丁寧な氏に対しても、△御論考（筆者注―前記後者の論）は「舞姫論争についての一異見」について触れて下さっているが（『承前』）以後については触れておられない。この部分にもあらためて目を通していただければ、御論はかわるのではないかと思われるところもあった。△と△あとがき△で述べているが、私には無駄なことばであるように思う。目を通して変わる程、小泉氏の先入観は弱くないからである。

○佐々木充氏の「鵬外『舞姫』論」（千葉大学教育学部研究紀要）26巻1号、昭52・12）。今まで見てきた論のうち、大里氏のものと共に感銘深かったものである。でき得るなら両氏はお互いに相手の論と読み比べ、さらに藤本千鶴子氏の論のよいところも考慮して、補論を書いてもならないものか。抽象語を弄しての難解な論でないし、文脈無視のさわりに酔って短絡的に外部的問題と直結させるお粗末論でもない。明確な問題呈示の上の丁寧な作品読解で、頑な責任追求視点に立たず、柔軟に作品構造も視野に入れて（筆者注―大里氏のはこの点に弱い）論じている。両氏の論に好感を持ち、感銘を受けた所以である。しかし、尚も両氏の論に、見方の相違や読みのズレもあるのは、『舞姫』という作品の複雑さ、微妙さ、即ち分裂危機の孕む綱渡りの統一性を要する問題呈示の仕方に伴う、それらがあるからである。嘉部氏の論と接点はないが、敢えてとりあげた。既に重松泰雄氏によって部分的に利用されているが、もっと本格的に検討対象になり、作品の△読み△そのものを、まず深めて欲しいからである。つまり、『舞姫』の作品としての本質内容を明らかにしないような論が横行し過ぎて欲しくないからである。

○重松泰雄氏の（イ）「3『舞姫』の青春」（近代文学2明治文学の展開）有斐閣双書、昭52・9・20）、（ロ）『舞姫』前夜―『舞姫』研究の一つの前提として―（『文学』第四十五巻第九号、昭52・9・10）、（ハ）『教材研究『舞姫』解釈の新しい視点（『国語研究』23号、長崎県高等学校教育研究会国語部会、昭54・3・10、尚、本稿は、昭和53年11月2日に長崎県立大村高等学校で開催された、県国語研究大会での「講演」を活字化したもの。氏の「許可を得て内容を一部要約」している部分がある由）、（ニ）『舞姫』再説―「特殊の面目」ある才子佳人の物語―」（『文学論輯』第二十六号、九州大学教養部、昭54・12・31）。質量から見て昭和五十年代の『舞姫』論の最大の成果と評しても、よいのではないか。唯、これだけ論じていながら、嘉部氏の論に一言も触れなかったのは、如何なる理由からであろうか。『舞姫』の青春」中には、私から見てもどうでもよいような論文も並べて紹介してあるのに、いくら『舞姫』の作品論

でなくとも、黙殺・無視してよい論なのであろうか。(最近の研究史の展望は、ほとんど七分お世辞、仲間内の乳くりあい、仲間外無視の内容で、まともなものは少ないから、その一つの例として見ておけばよいのかも知れないが)或いは氏は読んでいなかったのかも知れない。もっとも新しい「一再説」論中の「舞姫論争」の八隅外V文の取り扱い(筆者注「自解する」などと気楽に言表しているの)などから推測すれば、嘉部氏の論との関係の推測はこの程度にしておいて、先に「最大の成果」などと柄にもないことを言ってしまったので、以下、疑点の方を(他にもあるが)一つだけ問題にし論述しておきたい。一読して気になったのが、(イ)の15頁、(ロ)の12頁、(ハ)の13頁で展開されている「天方伯」解釈の楽天性である。(イ)は講演での言であるから、一応(ロ)の論に疑義を呈しておきたい。氏は、例の豊太郎が天方伯に「承はり侍り」と「一諾」する件りを引用した上で、まず次のように論じる。△ここでまず注目を要するのは天方大臣のことばであらう。余りにも短い発言だが、それはきわめて大きな示唆を含んでいる。たとえば、天方は、豊太郎に「君が学問こそわが測り知る所ならぬ云々」と語っている。君の学問の程度は自分にはわからぬがというのは、それは要するにどうでも良い、最終的にそこを問うのではないということであらう。だとすると、これは前述の官長とはまことに対照的な態度だと言わねばならぬ。官僚学の「岐路に走る」のを咎めた官長の窮屈な考え方に比して、天方のこの発言は遙かに

おおらかな度量と寛容振りを示していると言つてよい。そこに豊太郎の「語学」を利用せんとする意図はないわけではないが、しかし一方、「知識」万能の学問ならぬ「民間学」を、また、そのような「民間学」によって成長した主人公を大きく包容してくれるような宏量さが天方にあることも確かなのである。V実はここまでは、天方伯の前半のことば「君が学問こそ測り知る所ならぬ語学のみにて世の用をなすべし」に対する氏の解釈なのである。氏はこの前半のことばもさらに分断して自説に都合のよいように解釈している訳であるが、それにしても少しお目出た過ぎないか。天方伯が豊太郎の「学問こそわが測り知る所ならぬ」というのは当り前ではないか。「魯西亜行」の期間及び「翻訳」程度で「測り知る」ことのできる「学問」の程度など、常識的に言つて高が知れている。だから「学問」の内容など吟味できないのは当然で、「それは要するにどうでも良い、最終的にはそこを問うのではないということ」ではなくて、「そこを問う」ても、現段階では自分の眼で判断の仕様がなからぬ一応棚上げしておいて、短期間で判りやすい「語学」力の才能を見て、それだけで十分役立つ者と思つての言葉と理解するのが自然ではないか。しかも、かかる性質の話の場合、官僚を牛耳る親玉的存在が、「世の用をばなすべし」と言えば、官僚経験者なら、ここに言う「世」は彼らの仲間内で通る世間様であると共に、否それよりも暗に「余」をも意味することは、まず常識。だから今は判断できないが、後に「世

の用」にならぬ「学問」を今も鼻にかけ、「独立の思想を懐き人なみならぬ面もちしたる男」であり続けるのが彼の実情であるならば、天方伯は、「いかでか喜ぶべき」という事情は同じである、と考えるのが普通。従って「これは前述の官長とはまことに対照的な態度だと」即断してしまうのは問題である。

氏はその「対照」を△官僚学の「岐路」に走るのを咎めた官長の窮屈な考え方▽と△天方のこの発言は遙かにおおらかな度量と寛容振りを示している▽に見ている。しかし、後者は如上で見たように氏の検討している天方伯の短いことばだけで判断し得るものではない。氏の甘い認識から要請された解釈に過ぎないから。だから△：「知識」万能の学問ならぬ「民間学」を、またそのような「民間学」によって、成長した主人公を大きく包容してくれるような宏量さが天方にあることも確かなのである。▽（傍点筆者）という論も、何を根拠に「確か」なのか、私には判らないのである。又、前者の問題でも、官長は果たして△官僚学の「岐路に走る」のを咎めた▽のかどうか。確かに作品本文には「…余が頗る学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は…」とある。しかし、これは太田が官長のとった処置から、日頃の自分の行為を考慮して推察したことに過ぎない。作品を第三者的立場に立って冷静に読み限り、官長がもし彼を「憎み思ひし」点があるとすれば、豊太郎がわざわざ逆うように「…余がこの頃より官長に寄する書には、連りに法制の細目に拘つらふべきにあらぬを論じ、一たび法の精神だに得たらんには

紛々たる萬事は破竹の如くなるべしなど、広言し」（傍点筆者）その結果の実行とも思われるような「公」に許されている範囲内での「官僚学」（重松氏の言）を勝手に「余所にして」、それが「頗る」という位、目立ったからであらう。つまり、力点は△官僚学の「岐路に走る」▽挙を、わざわざ表沙汰になるよう目立たせようにある。子供っぽいと言え、そうだが、純真ではある。純粹培養男（筆者注）無論、ここではこの時点までの彼を評しての言である。△、太田豊太郎の面目ではある。しかし官長にはそのような挙が、「人なみならぬ面もちしたる男」と映るのは当然である。そして、固有名を持たぬ「官長」が、官僚主義的に、慎重に対応し、機を見て能率的な手間なしの非情な形で処置したことは言うまでもない。その点を「窮屈な考え方」とするのは結構だが、それは官僚機構の「窮屈さ」であって、「官長」は固有名を持たぬ故、その象徴的な「咎め」だて法の行為をとったに過ぎない。そういう「官長」と、固有名を持ち、しかもボスの存在たる天方伯と、何の断りの叙述もなく、比較すること自体、私には意味あることとも思えない。もし二人を比較するなら「舞姫」形象の鵬外の作為性の問題点でまずなされるべきであらう。以上のように見てくると、天方伯の「おおらかな度量と寛容振り」と氏に映ったものも、伯の都合のよい範囲内での親分的発想の見せかけとも解釈でき、それ程「対照」的に見る必要もなく、一皮むけば同じ穴のむじな、とならない保障はどこにもない。先引の氏の前提部分の論

述がお粗末である以上、続いて次のように論述していることは、論として弱いことと自明であるが問題にしておく。△このことは、さらに続いて来る「滞留の余りに久しければ云々」ということばによっても裏付けられよう。「様々の係累もやあらん」という言い方には、天方の並み並みならぬ苦勞人の面影が透けて見える。若しこの時、相沢が「さることなし」といった無用の虚言を弄しなかったら、どうであろう。天方は豊太郎を連れ帰ることを断念したであろうか。或いは、相沢と同様の強引な策を取ってエリス問題を解決せようと計ったのだろうか。おそらくはそのどちらでもあるまい。若しそうであれば、天方の「様々の係累もやあらん」の語は、そもそも始めから無かったはずである。老獪なありきたりの処世家のように、彼はただ黙ってさえいれば事足りたのだから。したがってこの点でも、天方はあの官長などとは対蹠的な存在だと言つてよいだろう。碌すっぱ、留學生の讒言を取り調べもせずに豊太郎を免職にしてしまった官長の狭い見に対して、この天方の心の広やかさと優しさとはほとんど比較を絶している。√（傍点原文のまま）。

まず仮定話の屁理屈文から片付けておく。相沢の「無用の虚言」がなかった場合を仮に想定して、「断念」説、「強引」「解決」説二つあげ、「そのどちらでもあるまい。」と氏は言う。その理由を△若しそうであれば、天方の「様々の係累もやあらん」の語は、そもそも始めから無かったはずである。√という点に求めるのである。無茶苦茶である。否定されている二例

は、相沢の「無用の虚言」がなかった場合の可能性として一応挙げられたものである。そして、相沢の「無用の虚言」は、あった或いはなかったいずれの場合の問題でも、天方の「様々の係累もやあらん」という問いの前提なしに考えられない。作品には「滞留の余りに久しければ様々の係累もやあらんと相沢に、問ひしに」（傍点筆者）となっている以上。氏はどうも天方伯のこの問いを、太田豊太郎に問うて、と解釈しているらしいのである。でなければ、右のような屁理屈文を考え出せないであろう。氏の説はお粗末な誤読の上に成り立っているのである。それにしても「並み並みならぬ苦勞人の面影が透けて見える。」とか、「あの官長などとは対蹠的な存在」だとか、「官長の狭い見に対して、心の広やかさと優しさとはほとんど比較を絶している。」とかの評言を臆面もなく、「天方伯」解釈に連ねられる氏は、一体天方伯のことばを、まともに読む気があったのであろうか。氏の頭の中には自説を通す先入観だけが支配していたのではないか。天方伯の後半の文を確認のため引く。「…滞留の余りに久しければ様々の係累もやあらんと相沢に問ひしにさることなしと聞きて落居たりと宣ふ。…」（傍点筆者）そして、先引の前半のことばを思い出しつつ、相沢が太田に語った、次のことばを想起して欲しい。「…今は天方伯も唯だ独逸語を利用せん心のみなり己れも亦伯が当時の免官の理由を知れる故に、強て其成心を動かさんとはせず……」（傍点筆者）これらを考慮して、天方伯のことばがいかに△老獪√

であるかを、氏の前に、私はなおも展開しなければならぬであろうか。それとも、天方伯が免官の理由を知っていて、なおも太田を誘うのは、心が広い証拠だと居直られるだろうか。それなら私は、それは官僚の親玉的存在としての功利的な計算裡の度量であって、「優しさ」とは別次元であると答えるであろう。氏が私の言わんとするところを察せられず、反論を示すならば、私はいつでも氏の論のおかしさを、懇切丁寧に詳論する用意がある。沈黙するという人老獪／＼さを、私は今は想定しないでおく。そういう手は氏自身の『舞姫』評価主体を自己否定するようなものだから。

○ 竹盛天雄氏の『『舞姫』論—序説—その「恍惚」をめぐる』(『国文学』昭47・3・20)、『明治廿一年の冬』—『舞姫』論—(『国語と国文学』昭47・4・1)、『豊太郎の反噓—『舞姫』論—(『国文学』昭47・8・20)、『豊太郎の反噓(二)—『舞姫』論—(『国文学』昭47・9・20)、『森鷗外『舞姫』—モチーフと形象—(『高等学校国語科研究講座第三巻現代国語(2)小説I』有精堂、昭50・3・10)。氏の一連の『舞姫』論を読んでも、私は不思議な思いに捕われた。これは研究論文なのであるうか、と。確かに読ませる力もあるし、作品の読みも浅くはない。感受性豊かであり、氏のその力を発揮すれば、つまらぬ作品でも感動させられるのではないか、とさえ思った。しかし、ここで氏の論を問題にしようとする、同じ紙数か、それ以上が欲しいのである。何故か、骨格が弱々しいのである。否、は

っきりあることはあるが、それを抽出して見ても、氏が『舞姫』から読みとっている問題をすくいとれないのである。と言うのは、どこか氏の裡にある混沌たる部分の方が、私にはその本質と思うからである。骨格ならぬ骨格、それが本質であるような研究論文とは？氏は不思議なパトスを有した物語り手であっても、論理的に物を考え、それを示して行く研究者ではないのではないか。氏が実年齢より十年位早く生まれていたら、研究者として通用しなかったのではないか。通用するような論文を書いていても、恐らく不適合性が露呈していたであろう。一連の『舞姫』論に対して疑義を呈していけば、多くあるようにも思うし、それを指摘していけば、「混沌」たる氏の本質が、それも見通しているようにも思う。つまり『舞姫』という作品のように、どこか整合的に把握・説明することを拒否しているのである。嘉部氏との論の関わりで言えば、氏の論には「相沢謙吉」署名問題に気づいているのでは、と思われる表現があったり、やはり全く気づいていないのでは、と思う箇所もあったりする。氏の論文の中には、先行研究者の氏名をあげず、その論を自分のことばに変えて取り込んでいる面があるが(無論、通説でないもので)、物語り手たる氏は、そういうことを自身身に許容することができるのであろう。処女著作に収められている論文を書いていた二十代の頃の私なら、こんなひねくれた感想を書かず、氏の論に酔えたのかも知れないが。ところで作品末尾の理解には、少しがっかりしたことを付記する。

○ 十川信介氏の「太田豊太郎の憂鬱——うしろめたさについて——」(『文学』第四十卷第十一号、昭47・11・10)。もう論じる余力も失っているので、気になった箇所を引用列挙し若干コメントしておく。「鵬外はたとえ一時なりとも、彼(筆者注)「豊太郎」のように「功名」を見失う、「愚行」を犯さなかった。」(傍点筆者、36頁、何故「愚行」なのか?、「もし彼(筆者注)「豊太郎」に強さがあるとすれば、それは人間の意志の力ではなく、「器械」の持つ強さであろう。彼は鵬外とは似ても似つかぬ、「弱くふびんなる心」の持主である。後に触れるように、忍月以来の命題である「恋愛」と「功名」の二者択一も……)(傍点筆者、36頁)。「鵬外が謫天情仙の評に便乗して、「太田生は真の愛を知らず」などと言うのは、忍月の批判に対する強弁にすぎない。第一、真にエリスを愛していなかったならば、豊太郎は何のために苦しみ、何のためにこの手記を綴る必要があったのだろうか。」(傍点は原文のまま、41頁)、前半は嘉郎氏の論を考慮すればよい。後半は、何も豊太郎がエリスを「真に」愛しているか、いないかの次元で問題にする必要はない。「愛」はそう簡単に割り切れるものではないし、何が「真の愛」かどうか、実は今までの『舞姫』論で誰一人として明確に納得のゆく説明をした者はいないのである。「石橋、忍月以来、数多くの『舞姫』論は、彼が「恋愛」を捨てて『功名』を選んだことを非難し続けて来た。……」(傍点筆者、42頁)、△「家に帰りし後に人事を省みざる病に罹ることなく又エリス

が狂を発することもあらで相語るをりもあしなば太田は或は婦東の念を断ちしも亦知る可らず」(『気取半之丞に与ふる書』)。この鵬外の言葉は、豊太郎の醜態を弁護しようとする彼の意図を越えて正確である。▽(44頁)、「正確」であっても、忍月が作者鵬外に呈した疑問の答えにはなっていない。従ってそのことをまず指摘してから、自分の論の文脈に使うべきである。最後に作品末尾の一文を△それは、せめて相沢を「憎」みでもしなければやりきれない、彼のうしろめたさのあらわれに他ならない。▽(46頁)としていることは、氏が太田豊太郎の現在の心を全く理解していないからである。これでは「単に責任の所在をすりかえる言葉」と解釈するよりひどいではないか。考えても見よ、「……やりきれない、彼のうしろめたさから」名前をあげられて「憎」まれる相沢の馬鹿々々しい立場もさることながら、豊太郎の甘えん坊ぶりも、従来¹⁾の責任転嫁論より一層はなはだしいではないか。その他、猪野謙二氏文引用の訳の分らなさ等多くあるが、この程度にとどめおく。

○ 平岡敏夫氏の『舞姫』成立前後(『日本文学』昭55・2・10)。この論は、題が示すように「一成立前後」が主体であって、作品の△読み▽そのものに力点が置かれているわけでない。その主体にしている方は、今問題にしていることと関係のないことが多く、対象にしにくいのであるが。しかし、5節で「エリス」問題を取りあげて、例の「舞姫論争」での「鵬外」文の有名な一節、「謫天情仙は嘗て此記を評して云く太田は真

の愛を知らぬものなりと……」を引用し、利用しているが、嘉部氏の論に言及してからでないと、おかしいのではないか。氏は「自己の作中人物相沢謙吉名で反論した」とは書いているが、事実指摘にとどまっており、その意味するところまで考慮していない。この節で考慮していれば、6節、7節での氏の論も、別の論じ方になっていたのではないか。「真の愛」の多用自体、問題のピントがズレると私は思うのだが、何も「真の」愛の次元で問題にする必要はないのではないではないか。従来の『舞姫』論においては、この「真の」という点が論者に△情動△的に作用してしまつて、論理力を弱めていたと思うから。問題箇所を一つ一つ引用し検討してもよいが、今はとどめおく。

○ 藤本千鶴子氏の『舞姫』の構造と新しさ（『日本近代文学』第26集、昭54・10・1）。私は氏の△読み△については疑問に思うところが多いが、本論の本文で引用した評言に関しては、評価する。又、天方伯のことばに対する解釈も、前記の重松氏の楽天さ加減に比べ、鋭いと思う。氏は歯切れのよい文体で（前記竹盛論文となんと対照的か）、他にも随所に、その才気をしのばせる解釈を展開している。気力があれば、詳細に問題にしたい魅力ある論であつた。「特別」にあけておく。

○ 山崎国紀氏の「鵬外文学にみる「恨」の意味——『舞姫』論異見——」（『立命館文学』昭49・7）。氏には他にもあるが、「黙殺史」としてはこれで代表させる。「冒頭から縷々に述べ

られる△恨△の内的表白」に注目し、その△恨△の内情の基底を形成する「真正な愛」の問題をめぐり、まず「豊太郎のエリスに対する愛情」考察から氏は始めるのであるが、その考察の冒頭から、（或る意味で当然ではあるが）、例の「舞姫論争」での「鵬外」文の一節引用をするのである。無論、嘉部氏の論には触れずにである。だから「太田は真の愛を知らぬものなり」とか「太田生は真の愛を知らず」というのを、「ここに豊太郎の△愛△について、鵬外の鮮明な意識を見るような気がする」と平気で言つてのけられるのである。もう十分であろう。以下の論は、既に記した如く、太田の△愛△を「真正」であるかどうかの次元で問題にしても、『舞姫』論としては余り意味がないと、私は考えているので付き合いかねる。

○ 山崎正和氏の「第三章I愛情のような雰囲気」（『鵬外闘う家長』△河出書房新社、昭47・11△所収）。既に氏の論は多くの論者によつて取り上げられており、今更めくが、「黙殺史」としては逸することができない。氏も例の一節を引用して「要するに、豊太郎の女にたいするあの慈しみは『真の愛』ではなく、まさに『愛情のような雰囲気』にすぎなかったというわけだが、この発言は印象的というほかはない。」と述べている。無論、嘉部氏の論の存在も知らなかったであろう。そして氏も又、太田豊太郎の愛情を問題にして、「真の」ものかどうかを基準に論じ、自説に都合よく強引に読んでいっているのである。一体、男女の愛の問題を考えるのに、何か客観的基準にな

るような「真の愛」を想定して論じ得るものかどうか。氏だけではなく、多くの『舞姫』論者はそれを疑って見もしないのである。ひどいになると、近代的自我に自覚めた人間に相応しい「愛」云々などと言って論じる。「近代的自我」はそんなに万能なのですか、とからかいたくなる。受動的な行きがかりの愛の進行だから、「本当の愛」でないといった、阿呆な論まで出る仕末。ところで、山崎氏の論も、本文無視の自説展開であることの問題は一応棚上げして、仮に氏の言う如く「夫と父親を兼ねたような庇護者となるのが、豊太郎のエリスにたいする関係であった。」(筆者注—本文全体の流れに即せば、氏のこの論は偏向的な見方しかしていないと私は思っている。)としても、それ自体を殊更問題にする必要があるのかどうか。それがあつたのは山崎氏が通説をひっくり返す自論を展開しているからであらう。

○最後に、もっともひどいのが、『近代文学の成立期—シンポジウム日本文学⑩』(学生社、昭52・11・15)の211頁から218頁までの『舞姫』における「愛」の議論。嘉部氏の論文を抜きに、一番戲画的にするにはどうしたらよいかの好見本。一読をすすむ。

他に五・六人予定していたのであるが、もうよいであらう。詳細なものを別の機会に作成したいと思っているので。「舞姫論争」研究の方も触れたかったが、もう気力がない。思うように展開できず、自分の力の不足を思うが仕方ない。又、私の批

判自体も的はずれがあるかも知れないが、その折は反論願えれば幸である。論証を欠いた感想文でも無責任な評言を意識的には決してしなかった。従って、反論には、いつでも応じる用意がある。いやがらせ文以外は。「傍観機関」論争の結果のようになる予感をしつつ。

⑨ 引用は、前記論文より。

⑩ 冒頭文はいつ、どのような経緯で「相沢謙吉」が読むことになったか書かれていない。しかし又、冒頭文の言うところでは、「鷗外漁史」が『舞姫』という作品にして公表する以前、さらに言うなら「太田豊太郎」から、いつどのようなかたちで「回想記」が「鷗外漁史」の手に渡ったか明らかでないが、それ以前に「相沢謙吉」が読んでいたこと程度は、その口吻から察すれば、分るように書かれている。そして今も「吾友」と言い、読んだことを公表していることになるわけだから、「相沢謙吉」が盗み読みしたと考えて欲しいわけではあるまい。「太田豊太郎」の方から真意は判らないが「相沢謙吉」に見せたか、或いは見せることになった、としか冒頭文は解釈の仕様がでない。(落し物を拾い読みしたことまで考えれば別だが) 鷗外は、「相沢謙吉」をしゃしゃり出す条件作りからして、策におぼれていたのである。

⑪ 山本武利著巻末の別表によると、明治23年の「国民新聞」年間発行部数は、二六九四〇八二という。とすると二月一日創刊等の諸条件を考えると、一日七千数百部から八千部前後という

ところであろう。であるなら「一番よく出た時は二千部」という「しがらみ草紙」はともかく、△「国民之友」と比較しても新聞の方が層が広く、数も多いであろう。▽という推定は、(回覧等を考慮しても) 困るのである。まして「江湖新聞」は「国民新聞」より部数が少なかったであろうから、尚更である。それにこんな「論争」を丁寧^{マツマツ}に読む読者層は限られているであろうし、論争術上、どれだけ読者層問題を計算に入れられたか、私は疑問に思う。

⑫ 嘉部氏は「神田氏や小堀氏の指摘などを併せ考えても、鵬外の立論はすべてゴットシヤルに拠っており、鵬外はまさにゴットシヤルを紹介したに過ぎないとさえ言えるであろう。そういう意味では (Cfr. Rudolph von Gottschall, Studien) は、まさに鵬外の論旨を支え、背後に権威として存在しているのである。しかし……」(傍点筆者、14頁)と指摘しているが、私はうまく理解できない。傍点部分は何が言いたいのであろうか。しかも続いて「しかし……」と来るから余計である。

⑬ 小堀桂一郎氏の説は、鵬外架蔵の『小説神髓』の書き込みからの推察である。私はこのことを明らかにしたことは意義深いと思うが、現問題では、二次的なことと思う。理由は本文に記した通りである。逍遙があの「小説論」を読んだだけで、自分の『小説神髓』が問題にされているとは、常識的に言って気付くはずもないと思うからである。(逍遙とゾラの関係は竹盛氏等が興味深い報告をしているが) 第三者の場合は尚更であ

る。事実、小堀氏自身の「……他者への警告であるより前に、多分に今後の自分の文学活動へのあらかじめの弁護、いわば将来の道程への地ならし」などという屁理屈自体がそのことを意識してのことであろう。尚小倉吉氏は、「……文学者の間にゾラへの関心が高まりつつあったこと」の例をあげて、そのことは、「はば間違いない。そして鵬外もまたこうした状況にある程度意識していたであろう」とし、その対応としての「ゾラ批判」と、「逍遙への意識が結合し……」と理解し、その意味を捉えていく論を展開している。『文学者鵬外の出発——「小説論」発表の意図をめぐって』△信州白樺 第41・42合併号)しかし、私には、先行論、特に小堀論文の不正確な読みと、本文読みのお粗末から来ている論としか思えない。氏のあげている例程度では困るのである。

⑭ 尚、「鵬外はそのころ文壇の権威であった。」(傍点筆者)云々には時期的に言っても、「三文字屋金平(内田魯庵)」の『文学者となる法』の一節からの引用文(19頁参照)より、吉田香雨著『当世作者評判記』(大華堂、明治二十四年二月七日出版)の「独逸文学を以て有名なる陸軍々医学校の教官を以て有名なる鵬外漁史は近來メッキリと売出され大いに病家イナ声価を増されたり……」というような一節を引用した方がよいのではないか。尚、この著から鵬外論で引用をしている研究者を、私は寡聞にして知らないで、「鵬外漁史」の項だけ全文引用しておく。ルビを省き、旧字体は新字体に、変体仮名は現行仮

名に改めた。

「鵬外漁史……………」森林太郎君

独逸文学を以て有名なる陸軍々医学校の教官を以て有名なる鵬外漁史は近來メッキリと売出され大いに病家イナ声価を増されたりといふ君が高尚なる持論は我れ常にしがらみ草紙において閲読せり君が巧妙なる小説は我れ時に国民之友に於いて拝見せり然れども大言俚耳に入りがたく良薬口に苦々しき道理にや世人往々君を以つて学理的文学者と称せり是れ実に博士に對して失言の至りといふべし然れども是又無理ならぬ言草なり蓋し博士の文章は学理的の用語多くして實際的の妙味少く恰も頑愚の病者を捉へて解剖談をなすが如く甚はだ大業過るを以て読者に危懼の念を抱かしむるの嫌あり、是れ博士の学識人に超るにも拘はらず常に凡俗に用ゐらるゝことの浅き所以なり然れども彼の舞姫及びうたかたの記の如きは最も非凡の傑作にして名医の感賞する所なり嗚呼博士よ願はくはゲーテ、シルレルの分量を少しく減じて誰にも服用し得らるべき名剤の調合に一層注意あらんことを是れ我々文学病者の常に熱病否、熱望する所なり」

⑮ 「文学界」記事の一つの誤読については、畑有三氏が私信で指摘して来たとのこと、嘉部氏より聞く。しかし、ここでの問題は、もっと根本的なことである。

※ 拙論の校正段階で「日本近代文学」第28集に長谷川泉氏の書評が出た。

(就実女子大学助教授・本学非常勤講師)